

アミノ酸ボカシの作り方

<材料>	米ぬか	22kg
	もみ殻	3kg
	ゴマ粕(油粕)	8kg
	アミノ酸液	1リットル
	EM1号(木の花菌でもよい)	40cc
	糖蜜	40cc
	湯(40)	7リットル<原材料の25パーセント>

活性液を使う場合(活性液は、EM1号と糖蜜を使って発酵させ、活性化させたものです。)

活性液 400cc

湯(40) 6680cc

EM1号(木の花菌)、糖蜜は入れなくてよいです。

<作り方>

米ぬか、もみ殻、ゴマ粕を床に一ヶ所に積み上げます。

糖蜜を湯に溶かし、そこにアミノ酸とEM1号を入れ、混ぜる。

をジョウロでかけながら、スコップ(角型のものが使いやすい)で全体を切り返すように混ぜます。まんべんなく均一に混ぜるのがコツです。

全体が良く混ざるまで切り返します。水分が足りないときは、この時に水を加えながら切り返し、水分を調整します。握って団子状になり、指でつつくと壊れるくらいが目安です。

ポリバケツにビニール袋をしき、そこに のボカシを入れ、空気をしっかり抜き、ビニール袋を紐でしっかり縛ります。30 位の暖かい所に置いておくと発酵が促進されるので3~4週間ほどで使えます。常温でおくときは3ヶ月以上は置いておきましょう。冬場など10 以下だと発酵が進まないの、なるべく暖かい所に置くようにしましょう。

<使い方>

- はじめに田畑に有効微生物をより増殖させるために、適量を全面にふり、耕起することをお勧めします。施肥量は、次のページの表を参照してください。施肥量は標準的なもので、季節により、作物により、また田畑の特性により異なります。
- 元肥として利用するときは、溝状に施肥をすると、溝の深さで肥料効果をコントロール出来ます。また、株元に塊状に入れるのも良い方法です。
- ボカシは100%有機質肥料ですので、化成肥料と違い、畑で分解されるまでに、時間がかかります。種まきや苗の定植の少なくとも1ヶ月前には施肥をしてください。(出来れば3ヶ月前までに施肥を済ませると理想的です。)特に寒い時期は、長い期間おく必要がありますので、出来るだけ早く施肥を済ませてください。

- ・ 追肥として利用するときは、速効性はないので、早めに施肥をするよう注意が必要です。株から離れたところに浅い溝を作ってボカシをまき、上に薄く土をかけます。株から離れたところに穴を開けて、待ち肥として利用する方法も良いでしょう。
- ・ 速効性のある液肥を作ることにも出来ます。ボカシをバケツなどに入れた水に溶き、2～3日おくと液肥が出来ます。(毎日かき混ぜましょう。) 残りかすは、畝間に溝を切って埋めておくと無駄なく使えます。
- ・ 育苗土として使う場合は、土に適量混ぜ、適量の水を加え、発酵を促すように時々切り返しをし、少なくとも1ヶ月おいてから種をまいてください。(出来れば3ヶ月くらいおくとより完熟した育苗土が出来ます。) 戸外に置く場合は、シートなどをかぶせておくと良いです。
- ・ 未熟な堆肥を畑に入れることは極力避けましょう。やむをえず入れる場合は、ボカシを振りかけて、堆肥の腐熟を促進させてください。

<注意事項>

- ・ 定植または種まき直前に無理に混ぜ込むと、発酵して発熱したり、発酵によるガスが発生することにより、根の障害になったり、害虫の原因にもなりますので注意してください。どうしても前もって施肥ができなかった場合は、苗を定植した後から、畝間にうえからボカシを撒いてください。雨などで自然にしみこんでいきます。また追肥の要領で、株から離れたところに溝や穴を掘ってボカシをまき、土をかけておいても良いでしょう。
- ・ 開封後はひもで縛るなどして密封し、なるべく陽が当たらず、温度が一定の場所で保存してください。(密封しないとカビやすくなりますので注意してください。)もしカビなどが出た場合は早めに使ってください。少々のカビは畑に入れても問題ありません。

施肥量（施す肥料の量）

	㎡当たり	坪当たり	反当り
ボカシ	100～500g/㎡	330g～1.6Kg/坪	100～500kg/反

<参照> 1㎡ = 1m × 1m
 1坪 = 1.8m × 1.8m
 1畝 = 10m × 10m = 100㎡ = 1a
 1反 = 10m × 100m = 1000㎡ = 10a = 300坪

* 施肥量が少なめで良いもの（サツマイモ、ねぎ、トマト、カボチャ、枝豆、大豆、そばなど）

* 肥料が多めにいるもの（なす、トウモロコシなど）

注意 これはごく一般的に言えることで、田畑の特徴、前作に何を作つたかなどの様々な条件によって、施肥量が異なってきます。